

大学コンソーシアム京都 産学連携教育プログラム

プロジェクト企画実践コース プロジェクト報告書

実習先： 一般社団法人 Impact Hub Kyoto

11 月 13 日

花背フィールドラボプロジェクトを通して

0.一般社団法人 Impact Hub Kyoto や花背の紹介

実習先である一般社団法人 Impact Hub Kyoto は、世界各国にある Impact Hub の京都支部であり、「いまの社会、世界を変えたいと強く欲する人たちが集い、学び合い、新たな行動を起こす場所」を提供している。そのような実習先が数年来にわたって行っている「花背フィールドラボプロジェクト」に今回私たちは実習生として参加させていただいた。花背とは、京都市内から車で1時間程度北上したところに位置する、電波も届きにくいような中山間地域である。当プロジェクトでは、高齢化や人口減少が著しく進む花背の「関係人口を増やす」ことを目的とし、様々なイベントやパネル展示といった活動を行ってきた。

1.動画制作

1-1. 動画のテーマについて

花背フィールドラボプロジェクトの最大の目的は「花背の関係人口を増やす」ことである。この目的を達成するために、私たちは手段として「動画制作」を選択した。動画は全世代的な拡散の可能性が高いと考えたからである。

テーマとして、花背の特産物である「チマキザサ」を中心に据え、約10分の動画(以下「チマキザサ動画」)を制作することにした。チマキザサは花背において非常に高い文化的価値を有しており、花背の魅力を象徴する題材として最適であると考えた。

当初は、若年層をターゲットとしたショート動画の制作も検討し、「祇園祭」や花背の雄大な「自然」といったテーマを候補として挙げていた。しかしこれらは、時間的・労力的な制約を考慮し、最終的にチマキザサ動画のみを制作する方針に決定した。

タイトルは「チマキザサを守る人々-花背の自然を次世代へ」である。

1-2. 企画・構成

制作の第一歩として、藤井優三氏へのヒアリングを行った。藤井氏は花脊別所チマキザサグループの代表として、チマキザサの採集や京都市内への出荷の活動を担っている。ヒ

アリングでは、花背におけるチマキザサの文化的価値や地域の持続性などについてお話を伺った。この機会を通して、チマキザサに対する理解が深まり、大変有意義な時間となった。

次に行ったのは「カット割りの作成」である。スプレッドシートを活用し、映像構成について議論を重ねた。その結果、冒頭では花背の雄大な自然を映し出し、本編ではチマキザサに関わる三者ー京都大学大学院助教の貫名涼先生、花脊別所チマキザサグループ代表の藤井優三氏、そして Team Tell HANASE のみなさんーへのインタビューを軸とする構成に決定した。それに伴い、インタビューの質問案を複数回にわたり修正し、より充実した内容を目指した。

また、各所関係者へ撮影のお願いをするため「撮影許可申請書」を作成した。正式な文書作成には苦労したが、実習先に協力をいただきながら完成させることができた。

1-3. 撮影

撮影前に花背にてロケハンを行い、撮影場所を選定した。撮影は自然風景および三者のインタビューを中心に行った。

自然風景の撮影では、主にスタビライザーやドローンを使用した。機材の動かし方や固定の仕方などに工夫が必要で、慣れるまでに時間がかかった。撮影を重ねるうちに、必要なカットのみを的確に撮る意識が高まり、効率が上がっていった。

インタビューの撮影では、主に実習生のスマートフォン・三脚・ピンマイクを使用した。画角調整や音声環境の確保など、細部まで気を配る必要があった。

1 回目の撮影である TeamTell HANASE の収録は、花背の古民家にて行った。花背小中学校のメンバーで構成される同チームは、チマキザサの広報活動を行っている。メンバーのみなさんが大変協力的で、終始和やかな雰囲気の中で撮影を進めることができた。初回の撮影を無事終えられたことが、次の撮影への自信へと繋がった。

2 回目の花脊別所チマキザサグループの撮影は、別所自治会館にて行った。グループ代表である藤井優三氏にインタビューを行い、グループの活動内容やチマキザサの展望などについて伺った。印象的だったのは、撮影後も花背地域について熱くお話いただいたことだ。その姿勢を受け、より動画を作ろうという思いが一層強まった。

3 回目の貫名先生への撮影は、花背のチマキザサ保護区にて行った。貫名先生はチマキザサの研究者として、学術的な知見からチマキザサ保全活動に携わっておられる。チマキ

ザサの生態や保全活動の経過、防鹿柵設置の経緯を詳しくお話していただいた。この内容が加わったことで、動画全体の説得力が増し、深みが出たと感じている。

1-4. 編集

編集作業は、まず編集ソフトの選定から行った。両実習生ともに編集経験がなかったため、初心者でも扱いやすい「CapCut」を採用した。

次に役割分担を行い、オープニングとエンディングを山内、インタビュー部分を森が担当した。進捗状況の管理は週に一度の編集会議にて行った。この会議により、進捗状況の可視化だけでなく、編集作業のモチベーション維持にも繋がったと考える。

多数の素材から採用する素材を選定する作業は想像以上に大変で時間を要したが、編集スケジュールを余裕をもって見積もっていたことが功を奏し、最終的にはプロジェクト期間内に YouTube への投稿まで完了することができた。

1-5. 動画制作の総括

動画制作は初めての試みであったが、最終的に満足のいく作品に仕上がったと実感している。自らの手で形ある成果物を完成させることができたことは、大変嬉しく、大きな達成感につながった。

動画の掲載先としては、「左京区役所の HP」および「左京キラリ市」への掲載が確定した。一方で、反省として、プロジェクト期間内に掲載の経過を継続的に確認できなかったことが挙げられる。

また「花背の関係人口を増やす」という本プロジェクトの目的を達成するには、今後さらに多方面への発信が求められる。

今後も実習先に関わらせていただきながら、チマキザサ動画の活用方法を模索していきたい。

2.花背での活動

2-1. 花背初訪問

6月29日、花背に初めて訪問し、花背で精力的に活動されている方々に花背の現状や、花背が抱えている課題についてお話を伺った。車から降りた瞬間に聞こえた鳥の素晴らしい鳴き声や、一面の美しい緑、心地よい風を感じ、一瞬で花背という土地に魅せられたこ

とを私たちは今でも鮮明に覚えている。この時私たちは、この花背の良さを多くの人に伝えられる活動にしたいと心から思った。

ヒアリングを通して、花背の方々から生の声を聞き、花背が抱える多くの課題や地域の方々の情熱を実感することができた。みなさんのお話に共通していたのは、花背をもっと元気にしたいという想いや、地域一丸となって団結して社会課題に取り組むことの難しさであった。花背を活性化したいという共通の想いはあるのに、花背の集落が非常に広大な地域にわたって分散していることもあって、地域住民の意識統一を図ることや一つの同じ組織で活動することが困難であることをみなさん口にしていた。私たちは、このことから外側からはもちろんのこと、内側から地元の方々の手で地域を活性化させることも一筋縄ではいかない現実を目の当たりにすることになったが、これからの活動で何かこの問題の解決の糸口になるような活動ができないか漠然と思った。

2-2. 流しそうめん&鮎の会

7月下旬に、実習先が地元の方からお借りしている古民家、OMO-Yah!にて、流しそうめん&鮎の会を開催し、地域住民の方や花背に來訪した方々など約50名ほどで流しそうめんや鮎の塩焼きを楽しく食べて交流をした。私たちは、会場設営や料理の準備を手伝った。地元の方を含めた多くの方々との交流の中で、花背の豊かな自然の魅力を共有したり、様々なバックグラウンドをお聞きして今までになかった人生観や価値観を新たに発見することができた。

また、花背の方々はみなさんとても温かく、「人」もまた花背の大きな魅力だなと感じた。そして、2日目には花背の地理に詳しい方に交流の森の溪流や三輪神社参道など、花背の素晴らしい撮影スポットをご紹介いただき、動画制作に関してとても参考になった。

2-3. 松上げ、峰定寺護摩供養の見学

8月15日に「松上げ」という花背で伝統的に行われている愛宕信仰に基づいた神事を見学した。当日は普段花背以外で生活をされている方も祭りに参加されていて、深い地元愛を感じた。さらに、松上げの見物客もとても多く見受けられ、花背という土地にこんなにも多くに人が集まるのだなと、花背の魅力に気づいている人たちが大勢いることを体感し、動画制作の励みにもなった。

9月17日には峰定寺という有名寺院のご開帳日であったため、峰定寺に参拝し、護摩供養の法要を見学した。当日は、大阪や福井ナンバーの車が多く見受けられ、全国から信者のかたが訪れているようであった。

これらの2つの行事を通して、花背の方々の信仰心の厚い部分や大切になさっている部分に触れることができた。特に、峰定寺の護摩供養の際には、地元の方から花背が観光客で賑わってゴミ問題などが起きるのは本意ではない。花背のことを本気で大切に思ってくれる人たちだけでこれからも大切に守っていきたい場所だというお話を聞き、自分の中の地域活性化のイメージが大きく変わる事となった。制作している動画について、当時はPR動画のようなスタイルをイメージしていたが、このお話も契機となり、花背で精力的に活動されている方々の想いを伝える動画に方向性を修正した。

2-4. チマキザサ収穫体験

9月28日に藤井優三氏のご指導のもと、地元の中学生や実習先のスタッフの皆さんと一緒にチマキザサの収穫をお手伝いした。チマキザサの保護区内では自分の背丈ほどの高さでササが群生しており、一度保護区内に入ると自分とササだけの世界になってしまうほどであった。そのような環境下での収穫は大変困難を極め、体力もかなり消耗した。その後は、収穫したチマキザサの選別作業を行ったが、選別している中でいかに商品として使えるものが少ないかということがわかった。収穫や選別作業を実際に体験することで、インタビューで優三氏がお話していた苦労や思いに対する理解や共感がより一層深まり、お話を聞くだけではなくて、実際に体験して自分で感じる事の大切さを身にしみて感じた。

2-5. 京都ユネスコこども食堂 in 花背

10月11日に京都ユネスコこども食堂さん主催で花背にて採蜜とカレーライスの食事会を行った。当日は京都市内から小学生とその保護者様も参加された。専門家の方々のレクチャーのもと、ニホンミツバチの巣箱を開けて採蜜し、とれたハチミツは参加者自らホットプレートで焼いたパンケーキの上にかけて美味しくいただいた。私たち自身、採蜜の作業は初めてであり、ハチがたくさん飛んできて恐怖心を抱いたが、なんとか皆さんと協力してハチミツを採ることができた。採蜜の過程についても大変勉強となった。また、採蜜の時間以外では参加してくれた小学生とも交流し、自然や虫と一緒に触れる中で小学生にとっても花背の自然はとても魅力的で学びに溢れた場所であるということを改めて実感した。

3. プロジェクトを通しての学び

3-1. 森

私は花背フィールドラボプロジェクトの活動を通して3つの学びを得た。第一に「自分の考えを伝える力」である。実習先主催のイベントで社会人や地域住民の方とお話する機会が多くあった。その際限られた時間で自分の考えや立場を明確に伝える難しさを実感し、言葉選びや話し方の工夫が重要だと学んだ。第二に「スケジュール管理」である。撮影や編集が思うように進まない中でも、余裕の持ったスケジュールと柔軟な対応の大切さを身をもって感じた。第三に「議論する力」である。動画の方向性やインタビュー内容について何度も議論を重ねた。相手の意見を尊重しつつ、その上で自分の考えを伝えることを意識した。その結果、プロジェクトの質が高まるとともに、チームとしての信頼も深まった。これらの学びを今後の大学生活に活かしていきたい。

3-2. 山内

約5ヶ月間、私は花背フィールドラボプロジェクトを通して、地域課題解決の難しさや地域の方々との交流の大切さ、そしてチーム内での建設的な議論の重要性など、様々なことを実際の体験を通して学ぶことができた。特に、地方創生のイメージが私の中で変化したことは大変大きな学びであった。私が今までイメージしていた地方創生とは、過疎地域の伝統産業や観光資源を活性化し、観光客や移住者が増えれば町が賑やかになって、地域の人も当然にそれを喜んでくれるというものであったが、今回、この活動を通して、ただ人が増えただけでは消費されて終わってしまう、地域のためには流入してくる人の量より質が大切になってくる場合もあるということを身に染みて感じた。

また、プロジェクト全体を通して、建設的な議論の大切さを学んだ。チームで動くということは、当然、自分だけではないため、自分の意見と他人の意見のすり合わせをする必要があるが、お互い相手の意見にずっと同意だけしていたらいい議論ではないと感じた。やはり、いいものにするためには、言いにくいかもしれないが、相手の意見に対しても建設的に自分の意見を述べて、チーム全体としてのブラッシュアップを図ることが大切だと思った。

4. おわりに

最後に、本プロジェクトに携わっていただいた大学コンソーシアム京都の運営の方々、コーディネーターの先生方、Impact Hub Kyoto のスタッフの皆さま、花背地域住民の方々、そして動画制作に協力してくださった方々に心より感謝申し上げます。

以上

